

【埼玉】

日米友好「青い目の人形」90年ぶり届く 米宣教師の孫・渋沢栄一の地元八基小に寄贈

2016年2月14日

昭和初期、米国の宣教師シドニー・ギューリック博士（一八六〇～一九四五年）が提唱し、実業家渋沢栄一（一八四〇～一九三一年）の協力で米国から日本各地の子どもたちに贈られた「青い目の人形」。友情の印として、両国の友好親善を進める願いからだったが、開戦を機にその多くが廃棄処分される悲しい歴史をたどった。それに代わる新しい人形が約九十年ぶりに渋沢の生家にほど近い、深谷市の八基（やつもと）小学校に届けられた。（花井勝規）

「海のあちらの友だちの まことの心のこもってる かわいいかわい人形さん あなたをみんなて迎えます」

渋沢の誕生日にあたる十三日、深谷市下手計の渋沢栄一記念館で人形の歓迎会が開かれた。八基小に贈られた「スーザンちゃん」と渋沢栄一記念館向けの「シャノンちゃん」の二体が披露され、児童四十八人の歌声が響いた。一九二七（昭和二）年に同小の前身、八基尋常高等小学校などが開いた人形歓迎会で歌われたのと同じ「人形を迎える歌」だ。

八基小に残っている当時の歓迎会の模様を撮影した写真には同校を含め旧大里郡の十数校に贈られた人形が並んでいるが、同校をはじめ、ほとんどの人形が戦時中に「敵国人形」として焼却されるなど処分されたという。記録では当時県全体で計百七十九体が贈られており、現存するのはわずか十二体だ。

新人形の贈り主は、ギューリック博士の孫で、米国で大学教授を務めるギューリック三世（79）。当時、米国で深刻化していた日系人排斥運動に心を痛め、友好と平和を愛する心を子どもたちの間に育もうと祖父が始めた活動に感動し、その志を受け継いで約三十年前から日本へ人形の贈呈を続けている。人形には「人形が九十年前に太平洋を越えて送られた時と同じ『世界の友情は子供から』の精神で新しい人形を贈ります」とのギューリック三世のメッセージが添えられた。

今回、深谷市の求めでギューリック三世に新人形を依頼した渋沢史料館（東京都北区）の井上潤館長は「渋沢は世界の平和を願う子どもたちが育ち、成長してくれることを祈って日本から答礼人形を贈るなどの事業に取り組んだ。戦後七十年がたち、渋沢の原点であるこの地であらためて日米親善の意義や平和を考えるのは意義深い」と話していた。

歓迎会で司会を務めた児童会副会長の山賀さくらさん（12）は「戦争とはいえ、人形には罪はないのに処分されてしまったのは悲しい」と語り、「新しい人形は『二度と戦争を起こさないよう人形を大切にね』というメッセージだと思う。両国の親善活動に力を入れた渋沢栄一翁をあらためて誇りに思うとともに、いただいた人形をいつまでも大切にしていきたい」と決意を語った。

◇ ◇ ◇

渋沢栄一記念館は今回贈られた新人形二体をはじめ、戦前に県内の小学校に贈られ、処分を免れたうちの五体を紹介する展示会を開いている。三月二十一日まで。入場無料。問い合わせは同館＝電048(587)1100＝へ。



ギューリック三世から八基小などに贈られた新しい青い目の人形2体＝深谷市の渋沢栄一記念館で